interview 想像力をはたらかせた学びを

国語科教諭　佐藤　貴志

広報委員の本橋 快泉人君(もとはし・かいと / １年３組)が、授業担当である佐藤先生にインタビューをしました。国語は苦手だけれど佐藤先生の授業は分かりやすいと感じている本橋君。その秘訣はどこにあるのでしょうか。

（ さとう・たかし ）本校国語科教諭。特別進学クラスの担任を経て，現在国語科主任を務める。根拠をもって現代文を読み解く授業展開には定評がある。プライベートは２歳になる一児の父。駅で地方の物産展をやっていると必ず立ち寄ってしまう。座右の銘は「正直の頭に神宿る」。

志賀直哉から近現代日本文学研究へ

――本日はよろしくお願いします。

こちらこそよろしくお願いします。

――まず先生は保善高校に勤務して何年になりますか？

いま、12年目ですね。

――え、結構長いですね。

そうですねー、もう干支がひと回りしちゃいますね。

――では学校の先生になった理由とかきっかけがあったら教えてください。

元々のきっかけは、高校２年生の時の現代文の先生に出会ったことですかね。その先生の授業がすごくおもしろかったんですけど、その人みたいになりたいと思って教員を目指しました。

――先生の専門は近現代の日本文学だと伺ったんですが、なぜそれを学ぼうと思ったんですか？

うーん。正直、私は近現代の日本文学を学ぼうとは思ってなかったんですよね（笑）さっき話したけど、国語の教員になりたいというのが先にあって、教員免許を取るためには大学、それも文学部の日本文学科とかに行かないといけないので。正直最初は日本文学に強い興味があったわけではないんですよね（笑）

――そうなんですね。

専門が決まるのが大学３年生の時なんだけど、きっかけになった授業があってね。志賀直哉っているでしょ？志賀直哉を専門に研究している先生の授業を受けて、そのときに気づいたんだけど、それまでの人生で自分の心に残ってる作品の多くが志賀直哉のものだったんですよね。大学２年生

の時にそのことに気づいて、近現代日本文学、特に志賀直哉のことを勉強しようと思ったんだよね。

――僕からすると近現代日本文学と言われると難しいイメージがあるのですが。

うーん。難しい難しくないっていう言い方よりも興味があるかないかなんじゃないかな。逆にどのあたりに難しいイメージを持ってるの？

――僕は現代文が苦手なんですけど、筆者の考えとか登場人物の気持ちとかが読み解けなくて…なので文学って難しいものなのかなぁって。

なるほどね。でも日本文学の研究となると、選択肢をつくる側になるようなものなので、見え方も違うんじゃないかな。自分で作品を解釈して自分なりの考えを述べればいいですからね。だから難しい、難しくないっていうよりも好きか嫌いかのほうが重要じゃないかな。

想像力を働かせて、学ぶ

――先生は国語がもともと得意だったんですか？

そうですね。昔から得意でしたね。でも好きかって言われるとそうでもなかった（笑）読書感想文とかすごく苦手だったし。むしろ理科とか数学の方が好きだったから、理系の方に進みたかったんだよね、中学生までは。高校に入って理系科目の方は挫折しちゃったんだけど、国語の方は得意なままだったから、こっちの方面に進んだって感じかな。

――国語を勉強する上でのコツとかアドバイスがあったらお願いします。

そうだね、例えば評論文だったら自分の身に置き換えてみることかな。想像力を働かせて自分の身の回りの当てはまる事柄を思い浮かべる感じ。それができる人はどんな文章が出てきても読めるんじゃないかな。勉強方法についてはいくらでもあるので、自分にあうものを探していくしかないんじゃないかな。もし「こういう勉強方法がいい」っていう真理があるなら私は本でも書いて売りますよ（笑）

――先生の授業はわかりやすくて面白いと思うんですが、授業をする上で心がけていることってありますか？

さっき話したこととリンクするんだけど、身近な例とかを挙げて文章に書いてあることが自分にも関わることだということを認識してもらえるようには心がけてます。高校の現代文で扱う文章は抽象的で難しい事柄が結構出てくるので。難しいことを言っているようだけど、実は簡単なんだよ。身近にこんなに例があるでしょ、と提示するようにしています。

――授業内で生徒に求めることは何ですか？

積極性ですね。私が提示したことに対してよくわかるのか、ピンとこないのか、意思を表明してくれるとありがたいし、生徒とのやり取りの中で授業を展開していきたいですね。

――保善高校では今年からiPadが導入されましたが、何か変化はありましたか？

授業はしやすくなりましたねぇ。自分の頭の中を見せやすいんですよね、iPadって。私は今こういうことを考えているんですよ、こういうふうに整理しているんですよ、っていうのを示しやすいです。あとはみんなの考えや意見を集めたり発表したりするのも楽にできるよね。さっき言った君たちとのやり取りをしながら授業を進める上では、iPadがあるのとないのとでは雲泥の差だね。

お父さん業も奮闘中

――ここからはプライベートな話なんですが、休日は何をしていますか？

休日は子どもと遊んでますね。散歩連れていったり、ドライブしたりですね。

――お子さんと先生との様子を教えてください。

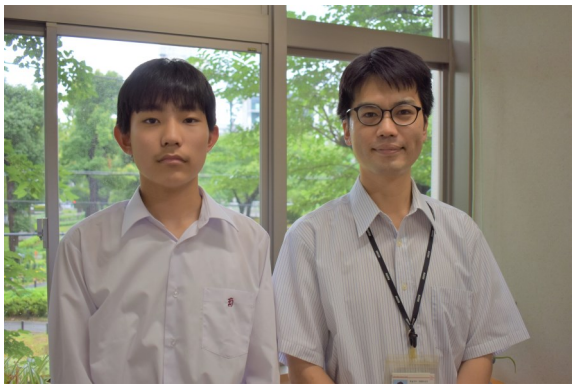
まだ２歳５か月だからねー、やりとりみたいなものはありますけど（笑）絵を描けってせがまれたり、絵本読めってせがまれたり。こういうことをしたいんだって拙いながらも伝えようとはしてくるのでそれに付き合ってる感じですかね。こんな感じの答えで大丈夫？（笑）

――まだ２歳なのですぐというわけではないですが、お子さんが中学生や高校生になったら、お父さんが先生ってどんな感じなのかなって（笑）

なるほどね（笑）２歳だとまだね。まぁ、子どもには振り回される毎日です（笑）

――最後に、保善生や未来の保善生へメッセージをお願いします。

自分のことを振り返ってみても高校３年間ってすごく意義深いものだったと思います。そのあとの人生に投射されるというか。いろいろな意味を内包していると思います。ただ、それって後になって振り返ってみないとなかなかわからないので実感はわかないだろうけど、君たちが過ごす高校３年間は本当に意義深いものだし、保善高校はその貴重な３年間をさらに意義深いものにすることができる場所だと思うので、在校生には一緒に頑張っていきましょうと伝えたいと思いますし、未来の保善生には一緒に頑張ってみませんか？と伝

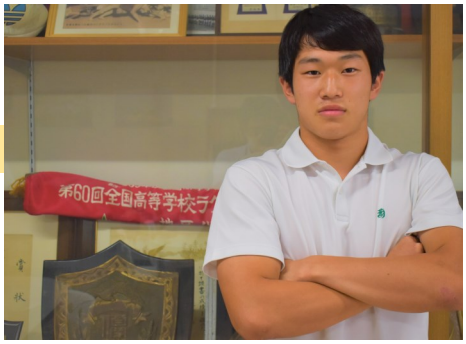


weiß　のこと…「知っている」と「白い」という意味を併せ持つドイツ語．まっさらな気持ちで知性を磨くことで「新しい自分」を見つけてほしい，という願いが込められています．

voice

《おいでよ！HOZEN》

教えてください，主将！



広報委員の金澤 彰汰君(かなざわ・しょうた / １年３組)が、同じラグビー部の先輩である主将の秋輪 剛志君(あきわ・つよし / ３年４組)にインタビューを敢行しました。

――先輩がラグビーを始めた時期やきっかけを教えてください。

2015年のラグビーワールドカップで日本が南アフリカに勝ったんですが、それを見たのがきっかけで、中学１年生のときに始めました。

――先輩から見たラグビーの魅力を教えてください。

15人というチームでボールをつないでトライを取って勝つという喜びに魅力を感じます。

――僕はまだ1年生なので心配なんですが、保善高校でラグビーと勉強を両立できるでしょうか？

自分も完璧にできているわけではないんですが（笑）ちゃんとできている人が多いので可能だと思います。

――勉強と部活を両立するコツがあれば教えてください。

メリハリですね。ラグビーをやるときはやる、勉強をするときは勉強をする。切り替えをしっかりすることが大切です。

――先輩がこの3年間で成長したと感じることはなんですか？

一番は体ですね（笑）体重も筋力量もかなり増えたと実感しています。それだけじゃなく、ラグビーを通じて心の面でも成長できたと感じます。

――勉強面での成長はどうですか？

中学時代はそこまでテストに向かって勉強するとかあんまりできなかったんですが、保善に入ってから、どうやったら点数を取れるか考えて勉強のやり方から考えるようになったのは、自分の中では成長かなと思います。

――次に保善高校のことです。先輩から見た保善高校はどんな学校ですか？

男しかいない環境でみんな仲良く一つになっていて明るい学校だと思います。

――保善高校の先生はどうですか？

いろんな先生がいますね。合う先生も合わない先生もいます（笑）でも男同士、相談しやすい感じはあります。

――保善高校での３年間で楽しかったことはなんですか？

一番楽しかったのは２年生の時の沖縄修学旅行です。

――逆に辛かったことはなんですか？

辛かったことかぁ…一番かはわからないけど、１年生の時の食トレかなぁ。毎日決まった量のものを食べてから練習するんだけどその時はきつかったなぁ（苦笑）

――最後に、後輩や未来の保善生にメッセージをお願いします。

３年間しかない貴重な高校生活を送る上で保善高校を選んで入ってきたんだと思います。悔いのないようにやりたいことをやりきってほしいと思います。

――本日はインタビューを受けて下さってありがとうございました。

制作／保善高等学校　取材／保善高等学校広報委員会
企画・編集・デザイン／ weiß編集部 (平能 / 細谷 / 杉澤 / 中里)